

011	From Editor
013	表紙の時計／ベル&ロス、BR-X5、
014	Editor's Choice!
	ウブロ、ビッグ・バン、ウニコブロンズ、
	IWC、バイロット・ウォッチ・クロノグラフ41、
	グラスヒütte・オリジナル、セブンティーズ・クロノグラフ・パノラマデイト・ファブグリーン、
	タグ・ホイヤー、タグ・ホイヤー・モナコ・ガルフ・スペシャルエディション、
	ブライトリング、ナビタイマー・B01・クロノグラフ41、
	カール・F.ブヘラ、マネロ・フライバック、
020	世界は時計で回っている。
022	アンデルセン・ジュネーブ・Xアスプレイ
024	英国のラグジュアリーの気品を宿したコラボレーション・モデル クロノスイス、スペースタイマー・ジュビター、スペースタイマー・ムーンウォーク、
026	アヴァンギャルドに進化するレギュレーター 〓 ロンジン・マスター・コレクション・190周年記念限定モデル、レコード・ヘリテージ、
028	スイス時計産業の中核として歩み続けた190年 フォルティス、ストラトラライナーS.41、
031	間近に迫る宇宙旅行時代に向けたツール・ウォッチの誕生 ルイ・ヴィトン・ウォッチメイキング20周年
039	「旅の真髄」を時計で表現し、 独自の世界を築く ルイ・ヴィトンは2002年に「タンブル」を発表し、時計の世界に躍り出た。今日では超複雑時計やコネクテッド・ウォッチまでもも揃える。20年の歩みを振り返り、また時計製造の拠点であるラ・ファブリク・デュ・タンルイ・ヴィトンのミシェル・ナバス氏にルイ・ヴィトンの時計製造について伺った。 2022年ブランド別新作情報パート3(ジュネーブ・ウォッチ・デイズ／日本メーカー／その他) 既存モデルをブラッシュアップし、より魅力的に、 より幅広い層に訴えることを意図した新作たち

069 オーデマピゲ、ミニユファクチュール・デ・セニョル、ホテルデオルロジエ

未来の発展に向けた新たな礎の誕生

079 時計も未来を考える IV

2021年にオーデマピゲはミニユファクチュール・デ・セニョルをオープンした。複雑時計の開発と製造を専門とする旧ルノー・エパヒに替わる工房であり、環境と働く人に配慮したモダンで明るい建物が完成した。またル・ラッシュのホテルデオルロジエも新築された。これらの概要を見てみたい。

垣根を越えて共に行動して地球を守り、人を守ろう

グッチは「人と地球」を柱に持続可能な社会に向けて広範な取り組みを行い、また、CEO カルボン ニュートラルでは他社に協働を呼びかけている。カルティエとケリングは、ウォッチ&ジュエリー イニシアティブ 2030 を立ち上げ、すでに15ブランドが参加する。このような「協働」の動きに焦点を当ててみた。

090 A.ランゲ&ゾーネ、1815 クロノグラフハンプトンコート・エディション、

ザ・プリンス・トラスト、支援のためにオークションに出品

091 ジャケ・ド・ロー・ド・ゴゴン・オートマタン、

ジョン・ハウの世界を腕時計で表現した第2作目が登場

092 ショパール、アルバイニーゲル、

レマン湖畔に再びオジロワシが戻ることを願って

093 カール F.ブヘラ、マネロフライバック、

「あなたはどの色からインスピレーションを受けますか？」

094 ノルケイン、インディペンデンスワイルドワン、

サステナビリティを考慮した新素材を採用した新コレクション発表

095 オリス、コールソンリミテッドエディション、

3Dプリンター使ったカーボン・ケースを採用した限定モデル

096 オメガ、スピードマスター X-33 マースタイマー

赤い惑星を旅する日を夢見て手元で火星の時刻を知る

097 腕時計新着情報

100 シヤネル、ファインジュエリー 銀座並木

職人たちの手仕事とアート作品をも堪能したい贅沢な空間

101 日新堂 銀座本店

老舗時計店で味わう伝統と親しみやすい対応

102 GPHG

ゴールドに輝くトロフィーを手にした17人

104 スイスの時計産業と日本を繋ぐスイス時計協会(FH)第6回

106-112 インフォメーション／問い合わせリスト／次号予告

アンデルセン・ジュネーブ×アスプレイ ッウル・デュ・モンド

英国のラグジュアリーの気品を宿したコラボレーション・ジョン・モデル

アンデルセン・ジュネーブとアスプレイのコラボレーションによるワールドタイムが誕生した。アスプレイは1781年にロンドンで創業し、ラグジュアリー・グッズの販売を行ってきた。時計との関わりは深く、多くの高級ブランドがアスプレイのために時計を製作してきた。



スヴェン・アンデルセン。1942年7月23日にデンマークで生まれる。コペンハーゲンの時計店で時計技術を習得した後、スイスにわたり時計店ギュブランでアンティークのタイムピースの修復に携わる。1969年に発表した“ボトル・クロック”で脚光を浴び、これをきっかけに1970年にパテック・フィリップのグランドコンプリケーション・アトリエに迎え入れられた。ここで9年間を過ごした後、1980年に独立して自身の工房の“アンデルセン・ジュネーブ”を創業。ビンセント・カラブレーゼと共に1985年に独立時計師協会(AHCI/Académie Horlogère Des Créateurs Indépendants)を創設したことで知られる。後進の育成にも力を注ぎ、フランク・ミュラーやフェリックス・バウムガードナーなどが彼の指導を受けた。

1980年にアンデルセン・ジュネーブを創設した独立時計師のスヴェン・アンデルセン氏は80歳を迎えたが今日も工房の大黒柱であることは変わらない。ジャンピング・アワーや永久カレンダー、オートマトンなど複雑時計を多く手がけ、また一点製作のビスポークは時計コレクターの垂涎の的でもある。しかしワールドタイムは氏にとって特別なものであり、それはパテック・フィリップの超複雑時計工房時代にルイ・コティエの時計を修復した経験に遡る。1930年にルイ・コティエが考案したワールドタイムは、回転リングに記された24時間表示と24都市表示を合わせることで24の時間帯の時刻がわかるというシンプルかつ利便性に優れたものであり、今日のワールドタイムのスタンダードともなった。

アンデルセン・ジュネーブでは1989年にルイ・コティエを記念して、コミユニケーション24と名付けた腕時計を発表した。フレデリック・ピゲ製の手巻きのCal. 9.51に自社開発のモジュールを搭載し、24の都市名を刻んだ回転ベゼルを備え、文字盤の中央にはブルーのエナメルを背景にゴールドの世界地図が施された。1992年には第2世代の、クリストファー・コロンプス、1996年に第3世代の、ムンドゥス、2004年に第1回国際子午線会議開催年に因んだ、1884が登場。2015年には1950年代にルイ・コティエが開発したワールドタイム腕時計へのオマージュとして第5世代となる、テンプス・テラエが誕生した。

新作の、ウル・デュ・モンドは、ムンドゥスがベースであり、9時位置に都市リングを回転させる控えめなリュウズを備える。なんといっても目を惹かれるのはブルーゴールドの文字盤の中央に施されたギョウシエで、同じパターンが自動巻きローターにもみられる。これはアスプレイが、エンジンターニング(ギョウシエと同義)と呼ぶ、手動旋盤を使って彫り込んだダイヤモンド形の様であり、ブランドの象徴でもあるが、過去に文字盤に採用したことはなく、今回が初めてだという。

6時位置には4Nゴールド製のアスプレイの筆記体のロゴが記される。このロゴは1950年代から1960年代にアスプレイとロレックスやジャガー・ルクルトとのダブルネーム・ウォッチに用いられたが、アスプレイと関わりが深いパテック・フィリップはこれを1952年にRef. 2499に採用した。この時計は2018年にサザビーズのオークションで390万スイス・フラン(約5億7400万円)という、Ref. 2499では世界記録の落札価格を樹立した。ところで、ウル・デュ・モンドは文字盤にギョウシエを施していることから表面に凹凸がある。そこで極薄の透明のプレートを重ねて平らにした後に、タコ印刷と乾燥を4回繰り返してロゴが施される。

特徴的なラグの形状はアンデルセン・ジュネーブのアイコンのひとつであり、一部の複雑時計に用いられてきた。こうしてイギリスのラグジュアリーを代表するアスプレイにふさわしい、気品を湛えたコラボレーション・モデルが誕生した。

「ロンジン マスター コレクション 190周年記念モデル」、レコードヘリテージ」

スイス時計産業の中核として歩み続けた190年

今日、スウォッチグループの主軸のひとつであるロンジンは1832年にスイス・サンティミエで創業した。それから190年の間、この地を本拠地として歩み続けてきたが、今秋にはその歩みを物語るクラシカルな新作がふたつのコレクションから発売された。



「ロンジン マスター コレクション 190周年記念限定モデル」。直径40.00mm×厚さ9.35mmのステンレス・スチール・ケースに自動巻きのCal.L888.5(ETA A31 L01。21石、毎時2万5200振動、パワーリザーブ最大72時間)を搭載。3気圧防水。ダークグレーのアリゲーター・ストラップ。価格31万3500円。

ロンジンは1832年にスイスのサンティミエにオーギュスト・アガシが創業し、今日もこの地を本拠地とする。1850年代に彼の甥のアーネスト・フランシロンが経営を受け継ぎ、ひとつ屋根の下で機械を使った近代的な時計製造を目指して1867年に工場が建設された。これがサンティミエを流れるスズ川の右岸の「ロンジン」(細長い野原)と呼ばれた土地であった。1893年には時計メーカーのなかではいち早く「ロンジン」の名称と翼がついた砂時計のロゴを知的所有権保護のための知的所有権保護国際合同事務局(現在の世界的所有権機関)に登録し、今日までこのロゴが継承されている。世界恐慌の打撃を受けた1930年代まで製造は拡大し、ストップウォッチやクロノグラフ、クロノメーターなどのムーブメントの開発に力を注いだ。その後、スイス時計産業全体が社会的・経済的な影響を受けて弱体化するなかで、ロンジンが中心となってETAやA.シールド、ブゾーなどの多くのムーブメン

ルイ・ヴィトン ウォッチメイキング20周年

「旅の真髄」を時計で表現し、独自の世界を築く

ルイ・ヴィトンは2002年にスイス時計の世界に躍り出た。このとき16世紀に作られた携帯時計を思わせるフォルムの「タンブル」がセンセーショナルにデビューを果たし、今日では超複雑時計やコネクテッド・ウォッチまでが揃う。何物にも囚われない大胆さが発展を導く。



2003年に発表された「タンブル LV277 クロノグラフ」。直径41.5mmのステンレス・スチール・ケースにゼニス製エル・プリメロ・ベースのCOSC認定クロノメーターのCal.LV277(31石、毎時3万6000振動、パワーリザーブ約50時間)を搭載した。

2022年ブランド別新作情報 パート3 (ジュネーブ・ウォッチ・デイズ／日本メーカー／その他)

既存モデルをブラッシュアップし、より魅力的に より幅広い層に訴えることを意図した新作たち

新作発表の形態も変化しているが、これはコロナ禍のみが影響しているわけではないものの、パンデミックがそれを加速してきたことは確かだろう。そうしたなかで8月29日から9月1日まで第3回目の「ジュネーブ・ウォッチ・デイズ」が開催され、33ブランドが参加した。今回はそのなかから10ブランドの新作をご紹介します。また日本メーカーと9月以降に発表された9ブランドの新作を取り上げた。

上の写真はジュネーブの大噴水前のモンブラン ロタンダに設営された1000㎡のジュネーブ・ウォッチ・デイズのバビリオン。52のショー・ケースが設置され、230点の時計が展示された。バビリオンは一般公開され、会期中に延べ約2500名が訪れたという。また欧米や中東、南米、アジアなどから約1200人の小売店や輸入代理店、ジャーナリストなどの時計関係者が訪れ、各ブランドはホテルのスイートルームやブティックなどにショールームを設けて新作を披露した。写真はブルガリのショールーム。



オーデマ・ピゲ ヱマニユファクチュール・デ・セニヨル、ホテル デ オルロジエ

未来の発展に向けた新たな礎の誕生

オーデマ・ピゲは、マニユファクチュール・デ・セニヨルをオープンした。ル・ロックルの高台に建てられた、ガラスで覆われた不思議な形状の建物に目を奪われる。複雑時計開発で知られた旧ルノー・エ・パピの工房が老朽化したため、場所を移して、「環境と働く人々への配慮」を基本に新築された。またオーデマ・ピゲが所有するル・ブラッシュの、ホテル デ オルロジエも自然と共存するモダンなものとなった。



時計も未来を考える〈Ⅳ〉

垣根を越えて共に行動し、地球を守り、人を守ろう

今日では働く人にとっての快適な職場環境づくり、そして気候変動に注意を払い、地球を守り、持続可能性のための行動を起こすことが企業の責任である。また社会全体からみると性別や国籍などによる差別がない平等性の実現が課題である。ラグジュアリー・メゾンもこうした問題の解決に向けて動き出しているが、個々に進めていては簡単に実現できるものではなく、時間もかかる。そこで「協働」の動きが注目される。今回は「人と地球」のために幅広い活動を展開し、協働を呼びかけるグッチとカルティエのほか、バイオセラミックスを開発したスウォッチなどを取り上げた。

Photo/Courtesy of Gucci



2022年9月20日から同26日まで開催されたミラノ・ファッションウィーク中、グッチは社屋のグッチ ハブ (Gucci Hub) で「双子」をテーマとしたGUCCI TWINGSBURG コレクションを披露した。このショーもサステナビリティを前提に行われた。

ゴールドに輝くトロフィーを手にした17人

11月10日、ジュネーブのテアトル・デュ・レマンで2022年のGPHG(Grand Prix d'Horlogerie de Geneva/ジュネーブ時計グランプリ)の発表と授賞式が行われた。ステージには各賞の受賞者たちが勢ぞろいしたが、最前列の右からふたり目はエグイユ・ドールとチャレンジ・ウォッチ賞のダブル受賞を果たしたMB&Fのマキシミリアン・ブッサー氏。そしてその隣は“グランドセイコー Kodo コンスタントフォース・トゥールビヨン”がクロノメトリー賞を受賞した、セイコーウォッチ代表取締役社長の内藤昭雄氏と開発者の川内谷卓磨氏。この時計はトゥールビヨン部門にノミネートされたが、日差-1秒~+5秒という高精度が評価され、クロノメトリー賞を獲得した。



イノベーション賞
ヴァン クリーフ&アーベル
レディ アーベル ユール
フローラル ウォッチ



クロノメトリー賞
グランドセイコー
Kodo
コンスタントフォース・トゥールビヨン



**オロロジカル・レヴェイレイション
(時計における新たな発見)賞**
シルヴァン・ピノー
オリジン



オーダシティ(大胆)賞
ブルガリ
オクト フィニッシモ ウルトラ



**エグイユ・ドール(金の針)
グランプリ**
MB&F
レガシー・マシン シーケンシャル EVO

年末が近づくと話題になるGPHGだが、2022年はMB&F初のクロノグラフのレガシー・マシンシーケンシャルEVOが最高賞であるエグイユ・ドール(Aiguille d'Or/金の針)に輝いた。GPHG 2022は左ページに掲載した15部門で構成された。2022年5月から同10月に発売された時計が対象で、時計ブランドが各部門に該当するモデルをエントリーすることから始まる。エントリー制のため、参加しないメジャーブランドも多い。エントリーされた時計は数百名の世界各国の時計業界関係者から成るGPHGアカデミーの投票によって1部門6モデルのノミネートに絞られる。次にアカデミーのメンバーがノミネートを対象に投票を行い、最多得点が受賞となる。このほか上の写真にあるクロノメトリー、イノベーション、オーダシティ、オロロジカル・レヴェイレイション賞が全部門のノミネートからアカデミーおよび30名の審査員の投票で決定する。またエグイユ・ドールと審査員特別賞は審査員の投票で選ばれ、後者はオートマトン製作者のフランソワ・ジュノー氏が受賞した。(T・K)

【次号予告】

2023年、

時計の世界の新たな動きは？

コロナ禍の影響が少しずつ薄れ、時計の新作発表会もオフラインで開催されるようになり、次第に2020年以前の状況に戻りつつあります。その一方で、年間に複数回にわたって新作を発表し、それらを各国でお披露目するという形態も増えてきました。そして2020年には大きく減少したスイス時計の輸出は順調に回復し、日本向けをみても2022年9月には前年同月の34.3%増という好調な動きでした。さて2023年はどのような流れになることでしょうか。2022年秋以降に発表された新作、および注目したいブランドを取り上げます。また2022年に続いてサステナビリティに重点を置いた活動に力を入れるブランドをご紹介します。

「世界の腕時計」第155号は2023年3月8日発売予定です。

世界の腕時計 定期購読のご案内

毎号、送料無料でお届けします！

お近くに書店のない方、毎号確実に入手したい方
便利な定期購読を是非ご利用ください。
特別定価アップ分、および送料はサービスいたします。

【年間購読料】

1年間(年4冊) **7,200円(税込)**
(3月、6月、9月、12月・8日発売予定)



【お申し込み方法】

- フリーダイヤル 富士山 富士山
- お電話で(年中無休24時間受付) **0120-223-223**
 - インターネットから <http://fujisan.co.jp/sekainoudedokei>
 - QRコードから 上記QRコードからアクセスして下さい。

【お問い合わせ】

富士山マガジンスerviceカスタマーセンター
パソコンサイト: <http://fujisan.co.jp/cs>
メールの場合: cs@fujisan.co.jp
に、お問い合わせください。

■注意事項

- 定期購読の契約は、富士山マガジンスerviceとの契約となります。
- お支払いのタイミングによっては、ご希望の開始号が後ろにずれる場合がございます。
- 地域によっては、発売日より商品到着が若干遅れる場合がありますので予めご了承ください。
- 定期購読は原則として途中解約はできませんので予めご了承ください。

編集の都合上、内容が一部変更となる場合もありますので、ご了承ください。

ワールドフォトプレス総合サイト <https://www.monomagazine.com>

WORLD M O O K

ワールド・ムック1285

世界の腕時計

No.154

令和5年1月15日発行

発行人……………今井今朝春
編集人……………香山知子
発行所……………株式会社ワールドフォトプレス
〒166-0004東京都杉並区阿佐谷南1-12-1
アズ阿佐ヶ谷
編集部……………☎03-6383-2319 FAX.03-6383-2583
メディアビジネス部
……………☎03-5929-7682 FAX.03-6304-9443
販売部……………☎03-6383-2390 FAX.03-6383-2574
印刷所……………大日本印刷株式会社

- 造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら
小社・販売部宛てにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
- 本誌掲載記事の無断転載・複製・転写を禁じます。